

Nadeshiko-no-kai Report

東京学芸大学附属小学校 ● 同窓会

撫子の会

会報 19 号

小学校はエンピツの匂い

歴史レポ

いま小金井の校庭にある

「豊島の銀杏」って何？なぜ豊島なの？

どこから来たの？いつ？どうやって？



このような？？が、昨年十一月に母校で開いた定例同窓会の懇親会で小金井卒や豊島卒の皆さんの話題になり、豊島卒の方が持参した懐古写真なども囲みながら記憶や知識、推論などあれこれ交わされて疑問は解けたようでした。…そこで本誌はこの機会にこの話題

を引き取り「豊島の銀杏」について改めてまとめてみました。実は平成二十二年(2010)に母校が源流豊島発祥百周年、小金井小誕生五十周年を迎えた年に発行した会報十一号に「豊島の銀杏」の紹介記事があります。そのレビューもしながら「なぜ？」を尋ねて…

●銀杏の植物的特性

先ず百科事典から要約紹介を。『各地に栽培される落葉大高木。雌雄異株で、春に緑色の小花を短枝葉腋（ようえき）に付ける。花粉は受粉後精子を形成。外果皮は秋に黄色に熟し、中にギンナン銀杏を含み食用される。イチヨウは病虫害に強く長命。そのため街路樹や庭木に多い。原産は中国。』どうやら銀杏の木は原始的で生命力は「ハンパない」。



●それが戦火で丸焦げに

会報十一号に、昭和十八年（1943）豊島卒枿幸澄枝さんの「豊島の銀杏」と題した文があります。（太字が引用文／：は編集部による中略）『昭和二十年（1945）四月十三日の夜に空襲があり：師範学校や寄宿舎は全部焼け：焼け野原の中に附属小校舎だけがポツンと残り：銀杏の木はまるで校舎を守るかのように焼けこげて半分真っ黒になつてしまいました。』

『戦争が終わつたのはそれから四ヶ月後。疎開先から生徒がもどり学校はにぎやかさをとりもどし：食べ物や着る物も少なく、大人も子供も生活が大変なとき：銀杏の木は、半分が黒こげになつても春になるとみどりの芽をたくさん出しました。この元気さは、戦争から立ち直ろうとしている人々を大いに力づけました。』

●火災と樹木

葉を茂らせ、それなりに大きな木は、根から吸い上げ続ける水分によつて火災の延焼をくい止める働きがあります。京都の昔、確か東本願寺だつたか、境内の大樹が火から寺を護つたという話があつたように思います。

ある樹木が大火に耐え得るかどうか。それには樹種や大きさ太さ、さらには周囲の状況によつて異なり、木にも運があります。

本稿レポーターの祖父母は文京区本郷に住んでいましたが、「豊島の銀杏」と奇しくも同じ夜の空襲で焼け出されました。このとき門の脇に在つた幹の直径六十センチほどの楠は炎に耐えきれずついに燃えました。その火がつく様子は、樟脳がとれるほど油性分が強い木のこと、まるで隅田川の花火だつたそうです。一方その近くにあつた「弓町の楠」も同夜の空襲に遭いましたが、幹が直径一メートルはあるうと思えたその樹は、幸いに翌年芽を吹き、戦後その敷地には「くすの木レス

トラン」ができました。

●長寿木・ご神木

樹木の寿命は屋久島の「縄文杉」に見るように人の到底及ばないところ。そのため人は大樹に大きな癒しの力や神聖を感じ敬いもする。ご神木とされる大樹はその典型でしょう。

戦火に我が身を焦がしながらもなお芽を吹き返し、戦争の痛手から立ち直ろうとする学校や子どもたち親たち、地元の人々をも励ましてくれた豊島の銀杏に「親しみ」や「願い」「祈り」を思うのは自然な気持ちでしょう。

ふたたび枿幸さんの文から。『豊島の銀杏の銀杏の木』という歌が作られました。この歌が大好きだという子どもや先生が多く：いつも歌つていました。』

人々が戦争の愚かさ平和の有難さ命の尊さを強く実感した時代でした。

●池袋から小金井へ

引用を続けます。『その後：豊島小の子どもたちは多くが小金井小に移り：銀杏の木も（子どもたちに）やさしさたくましさを身につけてほしいという願いで昭和三十八年（1963）の夏、トラックで引っ越してここに植えられました。：こんどは小金井小学校の運動場の真ん中で大きく枝を広げ、子供たちを見守っています。』

●樹木の移植

樹木を移植するには、掘り起こし根をつめ

池袋西口が再開発

残そう 豊島校記念碑

昭和三十年豊島卒 青木輝彦

て包み、場合により枝葉もつめる。そして痛めないよう、また重量バランスを崩さないよう配慮してトラックに積んで運ぶ。こうして行われる移植にはそれなりの費用を要する。いま見る「豊島の銀杏」の陰には、移築費用を惜しまずかけがえのない木を残そうとした先達の英断がありました。

写真は〈撫子の会〉寄贈「いちいの木」の工事例



こうして「豊島の銀杏」は小金井の校庭で今も母校と子どもたち先生たち卒業生たちを見守りつづけています。

本稿のレポーター 昭和二十五年追分卒 金子修也

●付記・追分校と銀杏

銀杏は、文京区本郷東大前にあった追分校の卒業生にとつても懐かしい。本郷通りの銀杏並木や東大構内の銀杏があり、それが小金井の「豊島の銀杏」に重なり、三校の絆を感じることができて嬉しいのです。

(了)

池袋西口の思い出

私の池袋西口の記憶は、戦後間もない昭和二十二年春、池袋西口にあった自由学園幼児生活団に入団した頃からです。現在の池袋駅は、世界で二番目に乗降客が多いターミナル駅、そのすぐ西側にあったのがわが母校豊島師範です。

最近、池袋はマスコミ等にも頻繁に取り上げられることが多く、目にする機会が多いと思いますが、昔は雑多な街、怖い街などと評されている時期もありました。しかも学校があった西口は東口に比べ開発もかなり遅れているようでした。現在の豊島区立池袋西口公園は、豊島師範学校が移転後の広大な跡地の一部に一九七〇年に開設されました。

現在は、バスターミナルや東京芸術劇場前広場という趣です。西口に強い思いがある私にとつては少し淋しい思いがあります。



西口再開発イメージパースⅡ夜の全景
記念碑はこの広場内の適切な箇所に移設することになります。

今後の西口広場の 再開発計画について

東口に比べ遅れていた西口再開発計画も現在着々と進行しているようで、高層ビルを含む青写真等も公表されています。この計画の範囲には「豊島師範学校・附属小学校之地」の記念碑も含まれ、公園として再整備されず。新しい施設は、駅前広場としてだけでなく、屋外でのオーケストラ公演なども開催できる先進的・多能的な公園です。しかし、この整備の遂行のためには公園の中にあるわが記念碑の移設が必要となります。

先日、移設に関して、区の責任者に直接会い、移設先の配慮と事前に同窓会への説明と了解をとって欲しい旨、お願いしてきました。その際、責任者の口からは「今までの西口再開発や今回の公園改修は、豊島師範の土地があったからこそ出来ることで、その件はよく理解している」とのお言葉をいただきました。

*

〈撫子の会〉としては、豊島区のアート・カルチャー特命大使に就任されている青木さんに特別顧問に就任していただき、西口広場における「豊島の記念碑」の移設について、区と協議して行くとともに、理事会内に作業部会を立ち上げていく予定です。



移築後に残すべきこの広場にふさわしい構成を検討
表記内容も本校と地域にとっての歴史記録となるよう再考
理事会に作業部会を設置してこれらを進めて行きます。

歴史レポ●関連2

成美荘の「養気閣」 解体される

豊島昭和三十五年卒／理事 柴田通彦

今年の始めついに解体へ

撫子の会の同窓生、特に豊島校卒業生の皆さんにとっては在校時代、四季折々に豊かな東久留米の自然を体験した成美荘生活の思い



老朽化した解体前の養気閣

出には忘れられないものがあると思いますが、その成美荘の中心的存在であった建造物「養気閣」が、今年の始めに取壊されました。「養気閣」の存在をめぐる状況については、会報十五号（2014・9発行）に記載しましたが、老朽化が進む中、その歴史的、教育的価値を何とか生かしたいという関係者の努力も虚しく、管理する学芸大学の財政的事情と保安上の問題によってこのたびの状況に至りました。

成田千里先生の

教育思想を体現した成美荘

昭和十一年、師範教育の本質に則り、自然を通して、正しく、強く、美しい人間教育の道場たらしむるといふ、時の成田千里校長の教育理想に基づいて成美荘は建設されました。

当時の東久留米一帯は、武蔵野のまれに見る地形の変化に富み、且つ風景明媚の地にして空気は飽くまで澄み、陽光燦爛とした大自然で、しかも都心より三十〜四十分の道程にあり、都会地生活の作業地としては誠に相応しい地でありました。即ち山林あり、水田あり、川あり、後方は小高い丘陵地帯の山林により西北風を遮り、前方は緩傾斜して畑地や水田が広がり、昔ながらの武蔵野の姿を現しておりました。

自然溢れる中で体験した

成美荘生活は今も鮮明に

主に昭和三十年代前半に小学校時代を過ごした筆者にとつても、成美荘は忘れえぬ地となつております。春には田植え、夏には養魚池で食用ガエルの大きなオタマジャクシを採取、秋には畑での芋掘りなど、まさに自然あ

ふれる野外活動の印象は半世紀以上経た現在になつても色あせることなく、鮮明に記憶に残つております。そしてその中核施設である養気閣は、一〇〇畳敷きの大広間と、確か三年生の時のそこの初めての宿泊まり会の経験から、とりわけのものがあつます。

現在にして思うと、豊かな自然の中で少年時代をのびのびと過ごすことが出来たのは、まさに成田先生の教育理想のお陰と言えるのですが、当時はそれが当たり前のように感じており、不届きにもひどい時は成美荘での校外学習の予定を忘れ、ランドセルで登校してしまい、クラスの友達からお弁当を分けてもらったなどという事もありました。

養気閣存続のための

努力も虚しく

四年前、養気閣の存続問題が起こつた際には何とか残したいと考えておられた藤井副学長(当時)から「撫子の会」としての努力を求められ、佐々会長を始め一部理事もその存続の可能性についての議論に参画してきましたが、財政上の問題は如何ともし難く、このたびの事態に至つたことは会としても大変残念なところですよ。

(了)



懐かしの百畳敷も…



…今は「夏草や」の跡地となりにけり

●この機会に知っておきたい「豊島修練会」
撫子の会宛に「豊島修練会」についての問合せがしばしばありますので、この機会に理解しておきたいと、元副校長で現在は豊島修練会常務理事の横山先生に解説執筆をお願いしました。
(次ページ見開き掲載) 編集部

成美荘を管理している

「豊島修練会」について

元副校長 横山 正

豊島修練会は、昭和十七（一九四二）年、文部省の認可を経て設立された財団法人です。

現在、文部科学省は健全な青少年の育成には野外教育の充実が極めて大切であると言っています。豊島師範学校では、成田千里校長によつて、今から八十年以上前に、これを実現していました。

● 成田校長は昭和七年から七年間の再任中に、昭和九年（一九三四年）鵜原に至楽荘、昭和十一年（一九三六年）東久留米に成美荘、昭和十四年（一九三九年）箱根に一字荘というように次々と三つの荘を建設しました。

● 至楽荘は師範と附属小保護者会が資金を出し合い、不足分は附属小保護者島田勝太郎氏から無利子で資金を借りて建設されました。

● 成美荘は大部分を国からの資金で賄い、一部を卒業生や保護者の負担で建設されました。

● 一字荘は、成田校長の教育方針に共鳴した江戸川吉之助氏お一人の寄付金で建設されました。

これら三荘を安定的に維持管理していくた

め設立されたのが「財団法人・豊島修練会」です。

● 当時、修練会の理事長は豊島師範学校長が務め、本部は豊島師範に置かれていました。昭和二十四年（一九四九年）、豊島師範が東京学芸大学になった際、大部分を国の資金で賄った成美荘は、東京学芸大学の所有となり、大学の農場となりましたが、残りの二荘は引き続き修練会が管理運営していくことになり、本部を附属豊島小学校に置くことになりました。

● しかし、農場が廃止され、その跡地に昭和四十一年（一九六六年）、附属養護学校ができること、附属小児童の農林体験もできなくなり、成美荘の宿泊棟である養気閣も、養護学校が管理するようになり、学生の宿泊施設などに使われるようになりました。養護学校の敷地内に新たな施設ができてからは、養気閣も利用されなくなり、建物の老朽化も進んで、防火・防犯上の観点から、今年の春、惜しまれながらも取壊されてしまい、現在は更地になっています。写真などを含む成美荘についての資料は、成美教育文化会館3階の撫子資料室に残っています。

● 黒目川（註・東久留米に流れる）沿いの成美荘の土地の一部は卒業生や保護者が購入したものであったので、その土地を活用し、昭和四十二年（一九六七年）、教育文化会館と幼稚園

が建設されました。幼稚園は独立した学校法人となりましたが、現在も豊島修練会と緊密に連絡をとりあつて運営されています。

● 成美教育文化会館ができてからは、財団の本部は成美教育文化会館になり、小金井小に財団の分室を置いて、分室が至楽荘と一字荘二荘の維持管理を行うことになりました。

● これは平成十四年まで続きましたが、東京学芸大学が国立大学法人化されることになり、二荘を小金井小で維持管理していくことが難しくなりました。

● そこで二荘を将来にわたつて安定的に維持管理していくために、豊島修練会事務局がこの仕事を担うことになりました。これによつて小金井小の負担は軽くなりましたが、事務局の負担はかなり重くなりました。

● 現在、登記上は至楽荘と一字荘は公益財団法人・豊島修練会が所有し、附属小金井小は利用者ということになっていますが、実際に財団を支えているのは、附属小の卒業生、元現教官、元現保護者であり、二荘には全卒業生の熱い思いが詰まっています。財団も法律の改正により内閣府所管の公益財団法人となりましたが、小金井小児童が最優先で利用できる施設であることに間違いありません。

（了）

副校長 関田義博先生より

今年も一字荘生活がスタート

五月の連休が明け、五年生の一字荘生活が始まりました。本校は一字荘と至楽荘における山と海での集団宿泊生活を通して、真に強くたくましい子を育てています。

一字荘では、四、六年生が宿泊体験学習を行います。四年生では千代田湖ハイクと自然調べ、五年生では車山登山と自然調べ、六年生では蓼科山登山、松本城と開智学校見学、自然調べがメインの活動になります。自然調べでは、植物・野鳥・鉱物など、子どもたちは調べたいテーマを思い思いに決め、荘周辺で活動に取り組みます。自然調べをしている子どもと行動を共にすると、子どもにも教えられることがよくあります。

「先生、今鳴いている鳥はホトトギスです。ホトトギスはカツコウの仲間です。」とか「クマザサの葉脈は並行脈です。二又分枝の平行脈はイチヨウだけです。」といった説明を子どもから聴くと、こちらの不勉強を痛感します。

一字荘のある茅野駅へは、JR中央線に乗って向かいます。今年から八王子駅で乗車する



スーパーあずさが新型車両になり、移動がより快適になりました。

● ちなみに一字荘や至楽荘は卒業生も利用できます。利用ご希望の方は

0424-71-6600 豊島修練会まで

お申込み・お問合せください。

今秋十一月に

「なでしこ音楽会」を開催

今年度は十一月二十一日(金)・二十二日(土)に本校講堂にて「なでしこ音楽会」を開催します。音楽会は三年に一度の行事で、本校の子どもたちは六年間で二回の音楽会を経験します。

音楽会で子どもたちが発表するのは、邦楽



や洋楽などの有名な楽曲が中心です。ふだんの音楽の授業において、子どもたちは友達と協力して創意工夫しながら様々な音づくりに取り組んでいます。ですから音楽会では、日頃の創造的な音楽表現を基盤にして、完成された楽曲での合唱や合奏に挑戦することになります。

音楽会当日の一年生は、過去に教鞭を執られていた故渡辺茂先生作詞作曲による「ふしぎなポケット」など、コミカル、リズムミカルな曲を歌うことがよくあります。一年生による身振り手振りをまじえた合唱は、実にかわいらしく感じられます。おそらく、渡辺先生の作品は四十年ぐらい歌い継がれていると思われまます。もちろん伝統的な楽曲だけではなく、工藤直子さん作詞の「わいわいのほらうた」など、大きな身体表現をまじえた、ミュージカルの要素が加味された楽曲が使われることもあります。

二年生以上の楽曲は、合唱と合奏の組み合わせになります。学年が上がるにつれて、完成度や音の迫力が高まっていきます。音楽会のトリは、いつも六年生です。六年生の演奏が終ると、自然とアンコールの歓声と拍手がわき起こります。アンコールを受け、自信に満ちた表情で合奏に取り組む六年生の姿、舞台上を真剣に見つめる五年生以下の瞳は、いつも強く印象に残ります。

(了)

皆さんからのお便り

銀座の画廊で

故・高浦浩先生の

個展が開催されました

今年六月十八〜二十三日銀座のシロタ画廊にて、故・高浦浩先生の第二十八回個展が開催されました。高浦先生の抽象絵画への挑戦



の数々が網羅されていて、とても充実した展示でした。

先生は「音楽的でありたいと思っています。絵を描きながら頭の中で音楽が鳴っている。」「やりたいことはみんなやったから心残りはないけれど…心残りがあるとすれば（ご自分の胸を指して）この中に描きたい絵がたくさんある。それを見せてあげたい。まだまだいっぱい描くよ。」とおっしゃっていました。

先生は、どのような絵を描きたかったのでしょうか。ぜひ拝見したかったですね。

~~~~~

三年ぶりに同期で

小金井昭和五十八年卒 吉田朋弘

三年ぶりに同期で集まろう！というところで、いつも幹事を買って出ている近藤さんの呼びかけで、同級生の栗原くんが経営する阿佐ヶ谷の「辰巳屋」に集まることに決定。前回に続く「小中合同・プチ同期会」の趣旨でしたが、毎回参加してくれていた嶋田（旧姓杉浦）さんが急逝、急遽彼女を偲ぶ会になってしまいました。

当日は、小学校卒業時、担任の一人だった小林道正先生、中学の担任だった石井健介先

▼小金井 S58 卒「3年ぶりに同期で」



イエーイ！ 3年ぶりに集まりました！



・・・に困まれた先生？生徒？  
・・・年齢差比が小になるにしたがい次第に不明化

▼小金井 S41 卒「65歳昼から夜まで」



集まった駆け出し年寄り約70名



この日ご欠席の三組担任鈴木先生を後日有志が東村山にお訪ねし先生宅から5分ほどの店にて。先生とてもお元気でよかったです！

生もご出席。一々三年生まで担任をしてくださった木村洋子先生は、ご体調が悪いにもかかわらず、冒頭だけでもとお顔を出してくださいました。

この日集まった同期生たちは三十余名で、しめやかに献杯を捧げ、亡き人の想い出を語りました。はじめはしつとりとした雰囲気でしたが、時間が経つにつれて（顔と名前が一致するにつれて？）次第に賑やかになっていきました。

説明はさておき、写真を撮りましたのでぜひご覧いただき「自分たちの期も！」という気分になっていただければ嬉しいですよ。

## 六十五歳、昼から夜まで・・・

小金井昭和四十一年卒

川田紀雄

還暦を五年過ぎまして特別な、特別な節目でもないのですが、気軽に声がけをしたところ七十人ほどが、原宿の中華料理店に集まってくれました。

年寄りとしてはまだ駆け出しでして、風貌こそ相応ではありませんが病気の話、孫や年金の話も出ず、昔話ばかりしている場合でもないし、といって最新の情報交換というほどのことでもありませんし…、仲間のいろいろな

時間の過ごし方やこれからの計画の話、それぞれワクワクと話して、昼から夜まで盛り上がる事ができました。

やっぱり男子校とかじゃなくてよかった。お酒はそれなりに弱くなつてはいますけど、みんな…。

~~~~~

●寄稿投稿歓迎

クラス会にかぎらずお仲間のイベントなど何でも歓迎です。お便りをお寄せ下さい。
十二頁に連絡・送付先アドレスを載せてあります。

編集部

「時は過ぎてても」

〈撫子の会〉会長 佐々智樹

時間が経つのが非常に早く感じるのは、やはり年齢のせいでしょうか。正月を迎えたと思ったら春の連休に夏休み。そしてあつという間に秋を迎え一年が過ぎて行きます。時間の経過とともに街も文化も流行も瞬く間に変わって行きます。

私が学芸大学附属豊島小学校に入学したのはおよそ六十年前のことですが、この間の東京の様変わりには凄まじく、現在は2020年の東京オリンピックに向けた建築と整備・改修工事が盛んに行われています。特に渋谷駅や東京駅が代表するように大規模な街の改造が進み、本誌のこの号で青木顧問にご説明いただいたように、この〈撫子の会〉のルートである旧豊島師範学校があった池袋周辺も大規模な都市整備計画が進んでいます。

●旧跡に記念碑を残したい

旧豊島小学校があった場所には東京藝術劇場が建ち、箱根の一字荘は長野県茅野に移転。モダンな建築で有名だった旧追分小学校の建物は多くの卒業生に惜しまれながら取り壊され、文京区の施設と区立第六中学校が建てられました。そして柴田理事からのご報告の通り、豊島師範学校自然教育の原点であった東久留米の成美荘にあった養気閣が、ついに解体されました。大学が所有する土地・建物であり我々小学校同窓会としては具体的な行動をとる事はできませんでしたが、あの百畳敷の大広間が無くなつた事は心から残念でなりません。私が初めて訪れた東久留米駅は駅前に大きなお米屋さんがあるだけで、すこし歩くとすぐに成美荘の正門があり、そこから広

大な田園が広がっていました。この半世紀の間の東久留米駅とその周辺の変貌を考えると仕方のない事かも知れません。

母校発祥の地にある記念碑は池袋西口公園の再開発にともない移転を余儀なくされますが、歴史にふさわしい場所に移し残せるように撫子の会を中心に卒業生が力を合わせて行きたいと思えます。

追分小学校の記念銘版は文京区立第六中学校に設置されました。間もなく創立百十周年を迎える学芸大学附属小金井小学校の、豊島小学校を源流とした学校の歴史を世に残して行くために、旧箱根一字荘と東久留米成美荘の跡地にも記念碑なりを同窓会として残して行けたらと思えます。

●お話をいろいろ伺いたい

豊島の地から小金井の地に移植され、長い間「時の流れ」を見守り続けてくれている唯一の生き証人は、歌でも馴染みのある「豊島の銀杏の木」です。もしも木が話せるなら、見守り続けてきた学校の話をぜひ聞かせて欲しいものです。

鵜原の至楽荘の建物は新しくなりましたが

管理して下さっている清水さんは、お父さんお兄さんから引き継いだと伺っています。いつかふさわしい機会に至楽荘生活と鵜原の海の今昔物語をゆつくりと伺う機会を持てればと思索しています。

街の景色は変わっても、豊島を源流とした追分や小金井小学校で育った我々同窓生の、強い絆で結ばれ母校を愛する気持ちは変わりません。

●歴史を後世に残していく

豊島の廃校でバラバラになった昭和三十九年卒業の私達。豊島の地で五年生まで一緒に学んだ一組のクラス会は渡邊成くんを中心に還暦を過ぎた頃から毎年行っています。二組や三組もクラス会が盛んだと聞いております。小さな動きが連綿と続き、同じ撫子の徽章を持つ三校同窓会である〈撫子の会〉が中心になって、その歴史を後世にだいに受渡し継いでいくことが大切と思う次第です。

末筆になりましたが〈撫子の会〉の運営に同窓会員の皆様には多大なご協力を賜り、役員一同を代表して心より御礼申し上げます。

● 1 平成二十八(2017)年度決算報告

左表のとおり/来たる定例総会で報告します。

収支決算報告			
●収入の部		●支出の部	
(科目)	(金額)	(科目)	(金額)
・前年度繰越金	12,946,453	・会報17号印刷郵送費	1,046,985
・ぶらり同窓会当日入金	58,000	・ぶらり同窓会経費	149,524
・入会費	1,140,000	・郵送費	2,184
* H29年3月卒業生×114名		・慶弔費	30,000
・寄付・支援・総会参加費	783,800	・HP維持改訂費	43,848
・利子	118	・次年度繰越金	13,655,830
収入合計	14,928,371	支出合計	14,928,371

単位：円

●平成28年度(平成28年4月1日～平成29年3月31日)

<内訳>
 ・会報17号・・・モノクロ印刷12p 8,000部、7,192部発送

● 2 この秋に同窓会定例総会・懇親会を開催します。

当日は豊島卒川口彩子さんの素晴らしいヴィオラ演奏もお楽しみ頂けます。
 詳細は同封カラー案内ペーパーをご覧ください。

▽ホームページ担当からのお知らせ

・「撫子の会」同窓会ホームページもリニューアル中です。
<http://www.nadeshikonokai.jp>

新たに、「各期の同窓会情報、同窓生の現在ほか、過去の学校生活にまつわる資料・情報・エピソード」など、会報で紹介しきれなかった記事や写真もフォローアップ予定です。

情報は、nadeshiko@nadeshikonokai.jpまで。

▽会報への寄稿のお願い

・皆さんと創る会報を目指しています。
 クラス会・同窓の仲間の集い、伝え残して行きたい母校の思い出話など、ほか何でも。
 先ずは左記までお申し出ください。

・川田 紀雄 電話 042-324-9912

・野久尾 悟 〃 03-3720-8023

・メール住所 nadeshikokaiho2013@gmail.com

●編集後記

年一回発行の本誌は、情報に鮮度・スピードを追うことはできません。そのかわり、テーマを立て記録性を重視してじっくり取り組む事が重要かと思えます。

そしてさらには、皆様からの寄稿のお力を欠かせません。今号も有難うございました。

会報II機関誌の英語はOrgan Paper (Magazine)で、その役割は「オルガン」の語が表している通り「撫子の会」という同窓会組織の形成維持にあります。

次号は：来年のことですが…「池袋西口広場と本校発祥記念碑」を掘り下げた記事ほかになるでしょうか。(編集部)

「撫子の会」会報 第19号

発行 平成30(2018)年9月
 編集 野久尾 悟
 印刷 (株)クラシブ

〔同窓会事務局〕
 東京学芸大学附属小金井小学校内
 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1
 電話：042-329-7823
 ファクス：042-329-7826
 撫子の会郵便振替口座：00100-8-709121
 加入者名：撫子の会

〔投稿寄稿問合せ先〕
 川田 紀雄 (電：042-324-9912)
 野久尾 悟 (電：03-3720-8023)